

第四節 アーノルドの着任

オランダ医学の最後の伝導者であったブッケマの雇期が満期となった明治二十一年（一八八八年）には新たに外人雇医師が求められることとなったが、ブッケマの解雇に関しては同年一月二十一日に発議され、二十五日に浄書された県達甲外発第四号「外国人解雇ノ件」と題する外務大臣宛届の按があるので次に示そう。

外国人解雇之儀ニ付届

和蘭国人

ティール、タブリニ、ブッケマ

右者長崎県立長崎病院医師トシテ去ル明治十六年三月以降雇入居候処合廿年十二月三十一日ニ而雇期満限ニ付解雇致候間此段御届仕候也

明治二十一年一月

外務大臣宛

知事名

（老通）（朱）

長崎病院雇ブッケマ昨廿年十二月限り雇満期ニテ解雇相成候ニ付例規ニ拠リ外務大臣へ御届方可然御配計有之度此段及御

通牒候也

明治二十一年一月廿一日

第一部外事課御中

第二部衛生課（長崎県衛生課）

これは「明治二十一年中、外事課決議簿、内外人契約ノ部」に見えるが、長崎病院はオランダ医学を廃して英国医学を採用した。これは既にオランダ医学が当時の最新の医学とは云えない状態にあったためでもあるが、新しい学制で取挙げられた学校教育の外国語が英語を中心としたものであったためでもあったと考えられる。そしてここに江戸時代以来、長崎に続けられたオランダ医学の伝統は終焉をみるに至るのである。且つ又、英語を中心として發達を遂げようとする教育制度の變化がこうした長崎医学の伝統を滅ぼし去るような状態に陥らしめたものであるにしても、東京におけるドイツ医学の發達と異り、英国医学の採用は誠に特異な變化と云えよう。

アーノルドは一八六二年の生れ、本名は Charles Arthur Arnold と云ったが、このアーノルドに関しては、二月四日發議、六日決議、淨書、發の外事課文書がある。これは、アーノルドの報酬を定めたものであって、「明治二十一年中、外事課決議簿、雜ノ部」に見えるものである。即ち

英医アーノルド氏へ金員御送付按伺

拝啓本年一月六日ヨリ長崎病院患者治療方費下へ囑托致候ニ付テハ巷ヶ月ノ報酬トシテ銀貨貳百円御送付ニ及候將又爾後該病院ニ於テ貴下ノ治療ヲ要シ候間ハ巷ヶ月前額ノ割ヲ以テ毎月末該病院ヨリ直チニ貴下へ金員御度付可致答ニ候条右様御了知相成度此段得貴意候承具

宛

知事代理御名

アーノルドの任期は未だ詳らかにしないが、当時の外人傭医師の例からみると、一ケ年間で、即ち明治二十三年十二月までの契約であつたろうと考えられるが、期間中、アーノルドは一時、任を離れている。次に「自明治廿年同廿一年、外事課決議簿、外国人顧問ノ部」に見える十月一日發議の外事録文書を示そう。アーノルドは横浜

第六章 第五高等学校医学部

へ賜暇を願つて旅立ったのである。

病院雇教師賜暇願御回答按伺

ドクトル、アーノルド宛

知事代理官御名

本日附貴簡正ニ接收陳ハ明日出帆ピーラー、会社汽船ニテ横浜江御旅行相成度趣ヲ以二週間之賜暇ヲ得度旨御申越了承右ハ差支無之候条此段及御回答候 拝具

これは次の書簡の返答である。

拝啓陳ハ小生義明日出帆ピーラー会社汽船ヨリ横浜へ罷越度候ニ付二週間病院出勤致兼候間何卒御許可被下様此段御請願申候也

明治廿二年十月一日

シー、エー、アーノルド

長崎県知事宛

雇 高橋元吉訳ス（高橋）

処で、このアーノルドは、着任した当時、即ち明治二十一年一月六日には、三十才にも満たない青年で、氣鋭の医学者として、新しい医学教育を行つたようであるが、未だその治療法、講義内容の詳細は紹介されていないけれども、長崎病院を退職した後は、その妻とともに大浦に住んで、居留地の諸外国居留人の治療を業としていた。

第四節　アーノルドの着任

そして、明治二十三年に上海でコレラが流行した際には、長崎県外務課は、その年の八月十一日に野口属を派遣し、上海におけるコレラの流行状況を問い合わせたものである。しかし、このアーノルドは、明治二十七年八月二十二日に僅か三十三才の若さで大浦の自邸に客死し、翌日、長崎市坂本町の外国人墓地に葬られた。その時、アーノルドの妻はその墓碑の台石に、愛情に溢れた聖詩を刻み込み、客死した夫を弔ったものである。現在、アーノルドの墓碑は、昭和二十年の原子爆弾によって傷んでいるが、葬儀当時に偲ばしむる俤を残している。